

寄書

奈良水彩畫講習會所感

凌風生

奈良に於ける二週間は、吾々にとつて最も有益な、且つ趣味ある、愉快な生活であつた、今故郷に歸つて、この間のことを追想するとほんとに、自分はこの現實世界とはなれて、天國にても住んで居た様な氣がする。吾々が常に敬慕して居た、大下丸山の兩先生は、趣味の殿堂に入らんとして、戸を叩いて居た吾々のために、遠く關西の地まで御越し下さつて、この戸を開き殿堂の奥深く進む様、熱心と深切とを以て導かれ、尊き藝術の趣味を解し、絶大なる自然を讚美し、殺風景な人の世を、生き甲斐のある、楽しいものと感ずるまでに、して下さつたのである。

吾々が講習中、先生から受けた、インスピレーションは、實に多い、先生が立派な技能の感化は今更云ふまでもない、たゞ先生は絶えず研究には熱心と忠實とを以てせよ、と云はれた。これが世の所謂教育者流に、口先だけであるならば、吾々には何等の感じもないのである、然るに先生の御描きになつた畫でも又吾々に對せらるる態度でも、凡てこれが實現せられて居るから、誰れも、この強いインスピレーションを、受けなにものは、なかつた。ことに、丸山先生が、御病氣であつたにもかかはらず、病をなつとめて、講義や實地指導に當られたこと等は、吾

々講習生が益勉め勵んだ所以である。こんな風であるから講習生の大部分は、永い夏のひかげを、尙惜んで、朝夜の明かるのを待つて、床をはれ起き、夕日が西に没して、あたりが暗くなる頃まで、寫生に熱中したのである、眞理は人格を通して活くと、實に至言である、

尙愉快に堪へぬは、先生始め講習生一同が快活であつたことである、毎日の會話が趣味あるユーモアーに富んで居たばかりでなく、講話會茶話會等はほんとに、面白かつた、

或人曰く、寫生も始めの中は面白からふが、暑いのに十日餘りも續けては、堪るまいと、こんな男に、吾々が水彩畫によつて得る様な健全な趣味が分けてやりたい、美的樂受の深ければ深きに隨つて、快感も亦大となるのは彼の官能的快感のみを追ふて、遂に華嚴か淺間あたりへでも行かなければ、しまつがつかないと云ふ様なのと、實に雲泥の差がある、吾々が繪筆をとり、自然と親む限りは、惱も悶もないのである、十四日間八十有餘の講習生が、吾れを忘れて、子供の様な美しい心になつたのも之れである。

大佛のあなだ官樣蟬の聲、之れは誰れも知る蕪村の句である、宮様の古い木立の下に、三脚几によつて、涼しい風を受けて居た吾等は、都の友が垂涎三尺も五尺もする處である。

雨が時々降つたから困つたらふ、と尋れた友人がある、我々はこの時々雨降を喜んだのである、都合のよいことには、奈良は雨ふりでも、寫生の出来る處が頗る多い、大きな堂の下から

塔や其の他色々建物を寫したり、大佛門の仁王、春日神社の寫生等、ことに宮嵐塔雨とは奈良特有の字句だとか、實に詩的だ。何れの會何れの講習でも、多數の人が寄れば面倒も起り、中には随分小言の出来るものである、然るに今度の講習は、水彩畫の好きなものばかりが、自分の最尊敬して居る先生の下に、集つたのであるから、小言や不平の段ではなかつた、本年も各地に色々講習が開かれたが、之れほど心のよく合つた愉快な、そして最も有益な趣味ある講習が、何程あつたであらふ？。

オドロ記

アイ、テイ生

○小生が奈良の講習會に出席して驚いたことが澤山あります、左にこれを並べて見ませう

○まづ第一に大下先生のセイの高いの、よくも鴨居へ頭をうつちけぬといつも感心してゐました

○次は會員森田君の體格、未丁年者で二十四貫は恐ろしい

○三山亭のオカミサンも女で十八貫は一才大きい

○奈良の大佛さまは是に比べて小さい

○何處の講習でも午前半日が通例だが、水彩畫の講習は朝から夜迄とは驚ろかさるを得ない

○朝の七時から十二時迄、午後の三時から六時まで、夜の八時から十時迄、合計十時間、此暑中を毎日教導の勞をとらるゝ講師兩先生の熱心には大に／＼驚かされた、そしてその間に作品

の批評もされる

○會員の勉強にも驚ろかされた、毎朝四時半に起きて寫生に出かける、雨が降るから休むかと思へば、却て雨景が面白いなんていふて出かける、よくもこんなに勉強が出来たものだと感じ嘆した

○モ一つ驚いたのは先生方の作品陳列だ、水彩畫を版より見たことのない小生故無理はないが、繪といふものはこう迄も畫けるものかと呆れた、そして精密なものもあり、粗末なものもあり、一々その自然によつて筆鋒の異なつてゐるのには敬服した

○まだ驚ろくことがある、これ等の作品のうちスケッチは三十分、一時間、永くて二時間位ひて出来たといふのだ、小生なら半日はかゝると思ふ

○素敵に驚いたのは、石川先生のスケッチに十五分間といふのがあつた、何も早いばかりがよいのでもあるまいが、全くグツ／＼してゐると自然の有様が變化して別物になつてしまふ、スケッチを早くする稽古は肝心だと思つた

○最後の驚きは十四日の大雷雨だ、非常な勢で雨が降る中を、ヒカ／＼と來たかと思ふと同時にガラ／＼／＼三山亭の近くに落雷した時（終）

*

*

*

*